

風土、文化、造形—古代人工構造物が示す光の効果 その(4)

Nature, Culture and Art - Ancient artificial structures has been shown
(indicated) the lighting effects (4)

神田 毎実
KANDA Tsunemi

This essay will discuss the visibility and effectiveness of man-made structures in a wider range of environments by attempting to take a bird's eye view of the geographical conditions in which they exist.

In this essay, while continuing to focus on the Acropolis and the Parthenon in Athens, I will attempt to examine the effects of light (visual effects) that man-made structures exhibit from an aerial photographic perspective, expanding the scope and object of study, and compare several cultures in order to understand the directionality of each culture as manifested in man-made structures.

The project also attempts to examine the directionality of each culture as it manifests itself in the structures of human population by comparing several cultures.

1.



Fig.1 地球の上空約5400kmからの地中海地域の眺め
Google Earth Proから取得
作成：2023年10月27日

Fig.1は、地表からの距離約5400kmからの地中海地域の眺めである。砂漠、山地、平地、岩場、海洋等が、それらの生成に関わる変質と変容の荒々しい痕跡を伴って映し出されている。それらは、個々に全く異なった存在であるように思われ、特に地中海を挟んだ南北の比較において顕著であるのだが、自身の視点に少し高度を与えることにより、一つの合理的な連続した広がり姿なのだということに気が付くのである。幾多の文明や文化の興亡の舞台であるその連続帯(態)は、文明や文化ごとに示された独自の造形物の姿を伴って在り、他の風土からやってきた者達からは、驚きに満ちたものであったに違いない。

これまで見たこともない風景や光景、様々な文物との出会いにより様々な驚きを表現するために様々な試みがなされ、繊細で複雑で大胆な思考に基づく新たな表現＝新たな価値が提示される。地球が持つ新たな環境を生み出し続ける循環と攪拌の仕組みと、人間の交配と拡散の営みによる新たな価値の生成の仕組みには大きな違いは存在しないと考えるのである。因みにFig.1は、『SEA ROUTES・・・FROM SIDON TO HUELVA INTERCONNECTIONS IN THE MEDITERRANEAN 16th-6th c. BC.』、及びF・ブローデルの著書『地中海の記憶 - 先史時代と古代 - 』¹⁾において記されたミケーネ人の活動範囲を参考に定めた。

2.

かつて地中海世界において強い影響力を行使したミケーネ文明²⁾は、暗黒時代³⁾の到来とともに急速に衰退し消滅したとされる。現在ギリシア共和国の人口の約3分の1を集める大都市であるアテネは、もとは古代ギリシアの小都市国家の一つであり、さらに紀元前1300年ごろのミケーネ文明時代には、ミケーネ市の砦の一つであったとされる。記録が残されていない時代という意味での暗黒＝闇の時代に、如何なる理由でミケーネ文明が衰退と崩壊と消滅を迎えるに至ったのかという事については、人為的な破壊、或いは自然災害等諸説があり定かではない。確かなことは、ミケーネ文明という広がり姿の衰退と崩壊と消滅を含む変化の後、アテネのパルテノン神殿やヘレニズム彫刻等に典型される、後世において古典＝クラシック＝常に新鮮な価値を喚起するものと位置づけられることになる優れた造形美術作品を生み出す地域、文化や文明が出現したということである。

ギリシア人とはギリシア語を話す人びとの総称であり、そのギリシア語を話す人びとをギリシア人と呼ぶことになるのも、後にローマの人々がその名称を与えたからなのだと以前記した⁴⁾。ギリシア語と呼ばれる言葉を介したネットワークへの参加の必要によるギリシア語の読み書き、意思疎通、に対する習熟に向けた努力の過程において様々な表現の可能性が拓かれ、例えば図示を介した伝達のみでは伝えられなかった微妙なニュアンスを付加、説明することも可能になったと考えられる。

何をして地中海世界と称するのかは知らない。まずはギリシア語と呼ばれる言語を介した様々な価値観の出会いと衝突と攪拌が生み出したダイナミックな文化的化学反応とその広がり捉えておきたいのである。ギリシア語自体も他の言語との出会いによって拡張し、更に繊細で複雑な表現の実現を指向し、重量や寸法の提示のみでは実現しないもの、定量化が叶わないものについての繊細で複雑で大胆な表現の実現を志向したに違いないと考えるのである。それは地中海世界の安定的な発展の仕

組みの一つとしても機能していたと考えられ、様々な優れた造形美術作品もその中で生み出されたのだと考えるのである。しかし暗黒時代の到来によるミケーネ文明、地中海世界という宇宙＝コスモスの崩壊と混沌＝カオスの到来の後出現した新たな造形表現は、古典として、以降その様式を大きく変えたことがない。暗黒時代と呼ばれる混沌のトンネルを抜けて始まった様々な文化の交配の過程で出現した古代ギリシアの造形作品は、その草創期を経てついに、時間、時代に左右されることの無い高みへと到達することとなった。他のものが及ばない位置、仰ぎ見られるものそのものへの到達。古典と称される様式の獲得は、現代にまで強い影響を与える視覚言語の獲得を意味するものであったと考えるのである。

ギリシア語の使用開始に関する最も早い痕跡はミケーネ市において認められる。そのためギリシア語が地中海全域に広まり、一種の基本言語として機能するようになったのはミケーネ人の活躍によるのだと考えられている。ギリシア語を話す者がギリシア人として認められるというのであれば、ギリシア人の中心にはミケーネ人があり、ミケーネ人による言葉を媒体として様々な活動のネットワークが作り出す広がり、総称が地中海世界と地中海文明であったということになるのである。そしてこのことは、地中海世界が、重層的な混血により生み出されているということを示すのである。かつてミケーネ市の勢力下にあった砦が、その砦のある土地、或いは地域と結びつきの深いとされる女神アテナの名を冠し、その後、様々な変遷を経ながらも現在に至るまで存続を果したものは、この地がギリシア人とギリシア語を話さない者＝よそ者の活動を許容・可能とする条件を予め満たしていたからであると考えられる。砦があった場所、地点、そこを取り囲む環境への思考が必要になるのである。

アテネ市は古代ギリシア語においてはアテーナイと呼ばれており、これはミュケナイという言葉がミケーネという言葉の複数形であるのと同様で、単数形と複数形の関係として説明される。アテネとアテーナイ、ミケーネとミュケナイ、単数と複数という概念によって説明される関係に、中心と周辺、点と面、求心と拡張、或いは膨張とでもいうような面的、量的な広がり・拡散、を感じるのは私だけであろうか。縮小と拡大、発生と消滅、生成と破壊、或いは突然の放棄。人間の様々な営みの過程により生成される変質と変容、変遷と淘汰を経て、数多くの砦の総称としてのアテーナイは、唯一無二のアテネへと集約されるに至ったのではないかと考えるのである。しかし、唯一無二とは特別なこと、他に類例を見ないということを示す連語である。それは孤高であり孤独なことである。唯一無二。果たしてそのようなものが存在するのであろうか。何にも似ていない独自の存在、何にも似ていない見たことがない存在、仮にそのような形容が相応しいという驚きとの遭遇があり得たとしても、多くの場合は、似て非なるものという範疇においての、距離、隔たりといった関係、類似性とその強弱、濃淡といった関係においてなのであろうと想像するのである。勿論それは一般論においてである。突然変異という形容の術が見当たらない唯一無二を否定するものではないのである。

2.

アクロポリスとは、「小高い丘上の都市」「高いところ」「平地内の孤立した丘」等の意味を持つギリシアの言葉であるという。「アクロポリスの丘」=「アクロポリス」+「丘」ということか。単なる言葉の綾のようにも思われるが、そのように考えると、「アクロポリス」という言葉に対して更に「丘」を加えた「アクロポリスの丘」は、「小高い丘上の都市を持つ丘」とか、「高いところの丘」とか、「平地内の孤立した丘の丘」というように、意外と丘全体の構造を正確に表現しているのではないかと考えられてくるのである。例えば、「小高い丘上の都市を持つ丘」の場合は、「アクロポリスの丘」=「小高い丘(の上)」+「都市を持つ丘」という具合に考えられるということなのである。それによって、「小高い丘」が「都市を持つ丘」を自身の上に載いているという二段重ねの構造を表現しているというようにも捉えられるようになるということなのである。

Fig.2-1 と Fig.2-2 は、パルテノン神殿を中心として描いた半径1.5kmの円に対して、それぞれ南北、東西方向に中心線を描き、その線分を基準として断面図を表示させたものである。写真の中心の矢印は断面図上の比較的に太く濃い高さ方向の線と対応しており、この場合はパルテノン神殿の位置を示している。

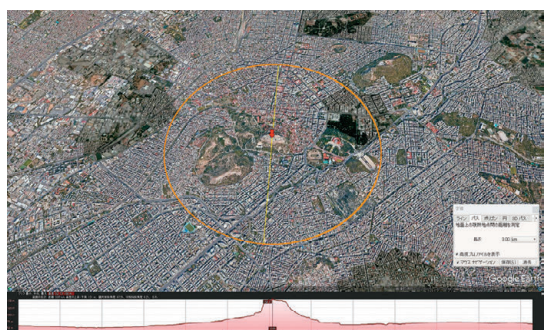


Fig.2-1 アクロポリスの丘南北断面
Google Earth Proから取得したデータに加筆
作成日：2023年10月23日



Fig.2-2 アクロポリスの丘東西断面
Google Earth Proから取得したデータに加筆
作成日：作成日：2023年10月23日

それぞれの断面図を眺めると、この半径1.5km圏内の平坦部において立ち上がる丘は、確かに二段重ねのような構造によって成り立っており、「アクロポリス」+「丘」=「アクロポリスの丘」が、単なる言葉の綾とは思えなくなるのである。その真偽は定かではないとしても、先ずアテネのアクロポリスの丘についてはその解釈は当てはまるのである。

アテネのアクロポリスの海拔は150mほどであり、上部構造の垂直に近い立ち上がりを見せる岸壁には、その壁にかかる負荷を支えるための控え壁が設けられている。上部の外周の長さは約800m、面積は約3200㎡を得ており、「丘上の都市」を構成する様々な構造物を配置することができる広がりを持っている。その広がり外縁部からは、アテネ市街、アッティカ盆地を取り囲む、東のイミトス山、北にペンテリ山、バルニサ山、南西にアイガレオの山々、南に広がるサロニコス湾を一望することができる。

遠方への眺望を得ることは、遠方へと眺望を与えることである。つまりこの丘は、自身に対しての視認を認めているのである。それは、遠方への眺望の獲得のみを目的とする一種の隠遁、更に踏み込めば、秘密主義からは距離を置いたものであるように思われる。その一方で、この丘は穢れのない者のみが立ち入ることを許されたと伝えられることから、清濁、貴賤、優劣、高低の区別、差別も存在していた事が理解される。

光はそれ自体が情報でありまた媒体であり、光よりも早く情報を届ける媒体は、現代においても存在しない。光を媒体とする情報を受け取ることで独立する個々の間に存在する隔たりを埋めるためには、情報を受け取る、採取する、或いは届けることができる地点、位置を自ら得るほかはない。それは自身の姿を他者に、環境に対して開放するということを意味するのである。自然と人工の融合による新たな視認性の獲得。アテネのアクロポリスはそれを体現し、自らの価値観、自らが標榜する価値観を、更なる遠方へと届けるための準備を整えたのである。ではアテネのパルテノン神殿はどのくらいの隔たりを越えて自身からの反射光を観る者に届けるのであろう。机上においてのシミュレーションではあるが、本学紀要第51号において用いた地平線公式⁵⁾を用いて値を得ることができる。但し、アテネのパルテノン神殿は破壊により屋根が失われており、神殿の全高を得ることは不可能である。そのため丘の海拔を代入の値としてこれを求めることとした。

地平線公式である $d = \sqrt{2rh}$ にアテネのパルテノンの丘の海拔150mを代入してみると、「d」の値として ≈ 44158 という値が得られる。 $44158m \approx 44km$ 。理論上の値であるが、パルテノン神殿は半径 $\approx 44km$ の彼方から視認が可能であったということになるのである。因みに、この神殿の柱の高さは10.6mとされているので、この数値を足したものを代入すると $\approx 45.6km$ 、試みに20mを代入すると $\approx 47.01km$ という結果が返される。ただし、現代においてもその視認には、高倍率の双眼鏡等の光学機器等が必要となるであろうし、気象条件等によって左右されることは言わずもがなである。

Fig.3は、シミュレーションで得られた、地表から140kmの距離からの俯瞰を用いたものである。まず地平線公式により得られたアテネのパルテノン神殿からの反射光が届く半径約44km圏を示す円を求め、その円に対する視界が遮られる方向・範囲を水色の破線で、視界が開ける範囲を黄色い実線で示したうえで、アッティカ盆地の東と西に存在する山脈の峰の伸びる方向それぞれに沿って線を加え、さらに平原の中央をほぼ二分する線を加えたものである。橙色の線分が西の山脈を、緑色の線分が東の山脈を、白色の線分が、アッティカ盆地をアクロポリスの丘を通過しながら北東から南西に縦断する線分を記している。



Fig.3 アテネのアクロポリスを中心とした半径約44km圏と視界の開放範囲、及びアッティカ盆地と盆地を挟む山地の断面図をシミュレートする基準線
Google Earth Proから取得したデータに加筆
作成：2023年10月20日

地中海圏は山にむさぼり食われている。押し合いながら海岸線ぎりぎりまで迫る、いささか度を越した山の姿は、地中海の風景に欠くことのできない骨格であり背景である。

中 略

開放的だが危険に満ち長い間ほとんど或いはまったく利用されることのなかった海に閉じ込められていたように、地中海の人々は山からも逃げるができなかった。⁶⁾

遥か高高度からの観察は、見る者の注意を細部から引き離し、大掴みであるがゆえに抽象される事物の本質を浮かびあがらせる。Fig.3には、F・ブローデルが、かつて自著『地中海の記憶』において記したように、まさに海洋に食らいつき喰り食うかのように入り込む海岸線まで迫る険しくザラついた複雑な斜面が、ところどころに樹木を纏った姿でもって映し出されている。大方の平地は狭く細く内陸に向かって切れ込んだ谷間の傾斜と共にある。それらが平坦路によって結ばれることはほとんどないため集落は孤立し、自ずと集団の存続に必要な物資の供給にも限りが生まれる。それは集団を形成する人間の集中の限界と同時に集団の拡張の限界を示すものである。何らかの理由により分断され孤立した小集団が、更に何らかの拡張を求めるならば、他の集団との何らかの手段による関係を生み出すことが合理であり、恐らく必須である。

油断のならない砂漠、海洋、岩場、高地。山間の、或いは海辺の狭い平地にささやかな安住を求めるとしても、その背景、基盤となる環境に変化が起こるわけではない。自身にとってより都合の良いと

思われる環境を手に入れるために単独で侵略を試みる力もない。既存の世界、社会が、一瞬にして主の存在を無にするほどの人知を超えた巨大災害を自身の被災を除外して待ち望むこと、例えばごく通常の営みとして儀式化されていた呪詛等によりそれを望むとしてもその実現は容易ではない。限界、孤立、孤独、不安。頼りとするのは自身のみである。確固たる自身の存在を前提として初めて自身の拡張は可能となろう。自らの集団を維持するための強い磁力が必要となり、おそらくその磁力の姿と、磁力を発するものの姿の可視化が必要となる。思想、軍事、経済、資源、技術、人口の保持と拡張。Fig.3には、人間の営みの前に立ちはだかる過酷な風土の一部が映し出されている。

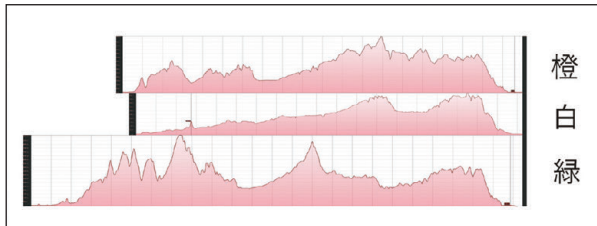


Fig.4 アッティカ盆地山地断面
Google Earth Proから取得したデータから切り出し編集
作成：2023年11月3日

Fig.4は、Fig.3上に設定した3色の線の部分に対するそれぞれの断面図であり、先にあげた同様のシミュレーションによって得られた図を上下3段に重ねたものである。高さと幅についてのスケールの比が、50：1となっているために、高低差が際立って強調された表現となっているが、その断面図を西方から、或いは東方から順番に重ね合わせると、アッティカ盆地の中央の断面は完全に隠れてしまう。垂直・水平方向に1：1のプロポーションとなれば、実際は、空の広がりを持った広々とした視界と穏やかな風景を連想させるものとなるのだが、東西の山脈によってアッティカ盆地への視界は遮られているという事実は十分に確認できる。

Fig.3から、パルテノン神殿を中心とした半径約44km圏は、アッティカ盆地の範囲を超えた広がりを持つものであることが理解されるが、同時にその視界が開放される範囲はパルテノン神殿を中心に南西に約100度の範囲であることも理解される。ここに至ってわれわれは、アテネのパルテノン神殿、ひいてはアテネは、自身を全方位に向かって積極的に開放しているというわけではないということに気が付くのである。

アッティカ盆地はゆっくりとサロニコス湾に下り、やがて海面下へとめぐりこんでいく。そして陸と海が交差するところにあるのは、今日においても尚、地中海における交易の一大拠点であるアテネの外港ピレウスである。アッティカ盆地の地形が生み出す地勢には、指向性、正面性、閉鎖性、防御性、ある意味においての攻撃性とそれらを踏まえた拡張性が現れている。アテネのアクロポリスの丘と丘の上の小さな都市は、恐らくそれらを象徴する、或いは抽象する存在でもあるのだ。

3.

「アテネのアクロポリス」という表現は、アテネ以外の都市におけるアクロポリスの存在を示している。アクロポリスが他の都市にも存在したという事実は、アクロポリスは都市にとって必要不可欠、

或いは極めて重要な意味を持つ存在であったということを示すのである。個々に異なる地政・地勢学的环境、そこに生活する人間の精神活動も含めた風土に存在しながら、いずれの都市においても等しく重要な役割を担うというのであれば、アクロポリスは古代ギリシアにおける人間の営みに通底する、何がしかの共通の志向・指向性を典型するインフラストラクチャとして位置付けることができる。

ミケーネ文明の中心地であったミケーネのアクロポリスは、急峻な斜面を持つ海拔約270mの丘の上に宮殿、或いは神殿の遺構を残している。地平線公式から得られる値は59245であり、ミケーネのアクロポリスからは約60kmの視界が得られるということになるが、視界の開放は周囲の山地に遮られ、自身の内海であるアルゴリコス湾に対する狭い範囲に限られるのである。

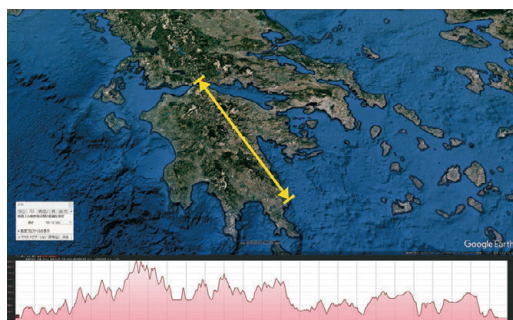


Fig.5-1 ミケーネ／南西側山地-アルゴリコス湾断面
Google Earth Proから取得したデータに加筆
作成：2023年10月31日

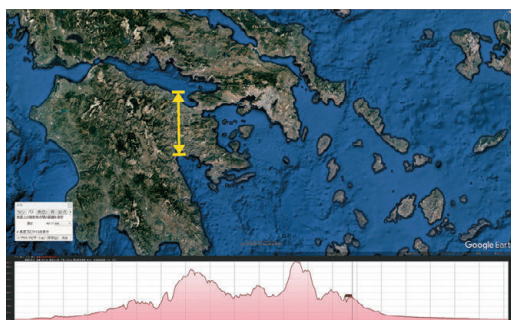


Fig.5-3 ミケーネ／北東側山-アルゴリコス湾地断面
Google Earth Proから取得したデータに加筆
作成：2023年10月31日

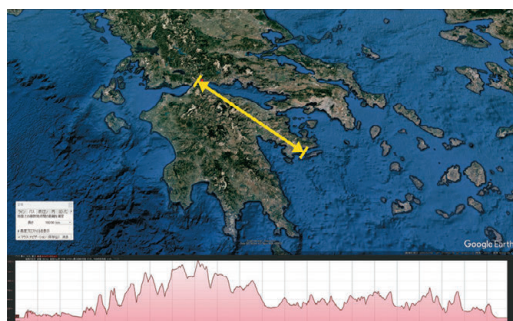


Fig.5-2 ミケーネ／コリンスス湾-山地-
アルゴリコス湾断面
Google Earth Proから取得したデータに加筆
作成：2023年10月23日

Fig.5-1、Fig.5-2、Fig.5-3もミケーネの平地を挟む山地とミケーネのアクロポリスを横切る線を対象とした断面を示したものである。高さと同幅の比に関しては、Fig.4に示された断面図と同様に強いコントラストを持つものであるが、アクロポリス、及び神殿、宮殿と平原の基本的な関係は十分に確認できる。

アッティカ盆地が接続するサロニコス湾は、クレタ海と連結する海洋であるミルトア海へと連結している。クレタ海はクレタ島以南に広がる地中海へと続いており、クレタ海と地中海の

境界上に存在するクレタ島は北アフリカとの交易の中継点である。ミケナイ市を中心としたミケーネ文明がギリシア本土を含めこの地域における支配的な位置にあった頃、この海域はペロポネソス半島の西岸を経由する交易路も含めて同文明の大きな経済域であった。Fig.1において眺められる地中海、或いは南北の内陸部までミケーネ人の活動は広がっていたとされる。ところがミケーネのアクロポリスの置かれる平原はその広域の活動を支えるには極めて小さい。広域に展開した点同士を結び付けたネットワークによる経済の存在と支配の様子がここに確認されるのである。個の集合としての全体。

ミケナイとミケーネの単複の関係にミケーネの構造が窺えるならば、アテネとアテーナイの関係にもその構造が隠されており、双方の間には音の異なり以外は存在せず、実は同じものなのではないかと思われてくるのである。

暗黒時代を経て、アッティカ半島のポリス国家アテネが力を持ち始めたころ、ペロポネソス半島にはアテネのライバルである軍事都市国家スパルタが本拠地を構えていた。ミケーネの南南西約76km、標高約230mの地点が、スパルタのアクロポリスの頂上である。アテネのアクロポリスの丘と神殿、或いは宮殿が市民生活の場に対して比較的大きな標高差をもって設けられていたのに対して、スパルタのアクロポリスと市民の生活の場の高低差は20m程度と小さなものであったようである。

Fig.6-1とFig.6-2は、スパルタのアクロポリスを北西から南東へ横切る線分と、北東から南西に横切る線分を定めそれに対応する断面図を表示したものである。この表示も高さの表現はかなり強調されている。

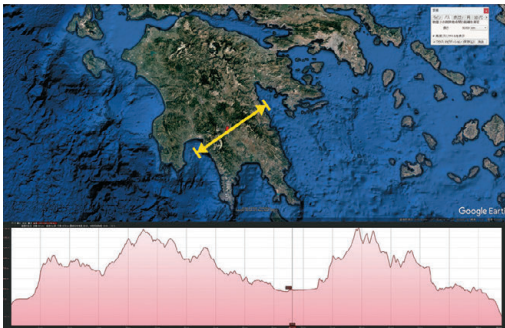


Fig.6-1 スパルタ／中央山地・盆地・ラコニア湾断面
Google Earth Proから取得したデータに加筆
作成：2023年10月31日

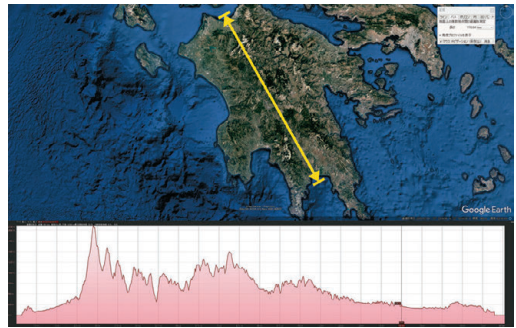


Fig.6-2 スパルタ／北東山地・盆地・南西山地断面
Google Earth Proから取得したデータに加筆
作成：2023年10月31日

この図の中でやや強い縦線と断面の交差点が、スパルタのアクロポリスの位置である。スパルタは四方を山地で囲まれた中山間地の盆地にあるために視線は遮られ、地平線公式によって求められたアクロポリスからの約54kmの値もあまり意味を持たない。海洋交易の中継地であるクレタ島は、自らの内海であるラコニア湾の入り口に位置するキチラ島からは約90kmの距離であり、これはアテネの外港ピレウスからクレタ島までの距離約250kmを考えれば圧倒的で、更にクレタ島に近い他の島へ寄港することを予定すれば、その優位性は揺るぎのないものである。

そのような環境において、スパルタがその中枢を置くために選んだ環境は、周囲に自身の存在や位置の確認を難しくさせつつ、同時に周囲の動向を眺めるに好都合な場所として評価される環境であると思われる。そこにはアテネにおいて感受されるものとは異なる指向性、正面性、閉鎖性、防御性、ある意味においての攻撃性とそれらを踏まえた拡張性が、一種の隠遁性を前提として示されているように感じられる。スパルタは一時ペロポネソス半島全域を支配したといわれるが、スパルタの本拠地が

置かれた平原のみにおいても、アテネを擁するアッティカ盆地にも勝るとも劣らない広さを擁していることに気づかされる。スパルタが周辺地域に展開する経済、言語、それらを含めた文物、文化のネットワークから距離を置き、隠遁、或いは籠城を連想させる体制にあって尚、一定以上の存在感を示し得たのは、自身の領土面積の広さがもたらす安定によるのだと想像できるのである。それは有事における兵站、つまり補給の観点からも重要な意味を持ったと考えられる。他者に対する示威ではなく、閉じられた内部との接続と求心の意図の存在と考えれば、ヘレニズム期における、アクロポリスの直近への劇場設置についても一つの合点がいくのである。もっとも同時期にアテネのアクロポリスの直下にも劇場が設けられたということを思案の材料に加えるのであれば、単に時代の到来によるものであったのかもしれない。

南に湾という小さな内海を擁しているという点、平坦部を擁しているという点、周辺に高い山地が存在している点においてミケーネ、スパルタ、アテネは類似している。しかし、ミケーネとスパルタのアクロポリスが平坦部の端の丘の上に山地を背景にして位置しているのに対して、アテネのアクロポリスは平坦部の内側の丘の上に山地と距離をおいて位置しているという点において趣を異にする。平坦部からの垂直方向への隔たりの大きさという点においては、ミケーネが最も大きく、続いてアテネ、スパルタの順となり、高台か否かという点においては、ミケーネとアテネは共通しスパルタは異なるのである。都市にとって必要不可欠なアクロポリスに与えられた位置と高さに、個々の都市の志向と指向性が現れていると考えられるのである。

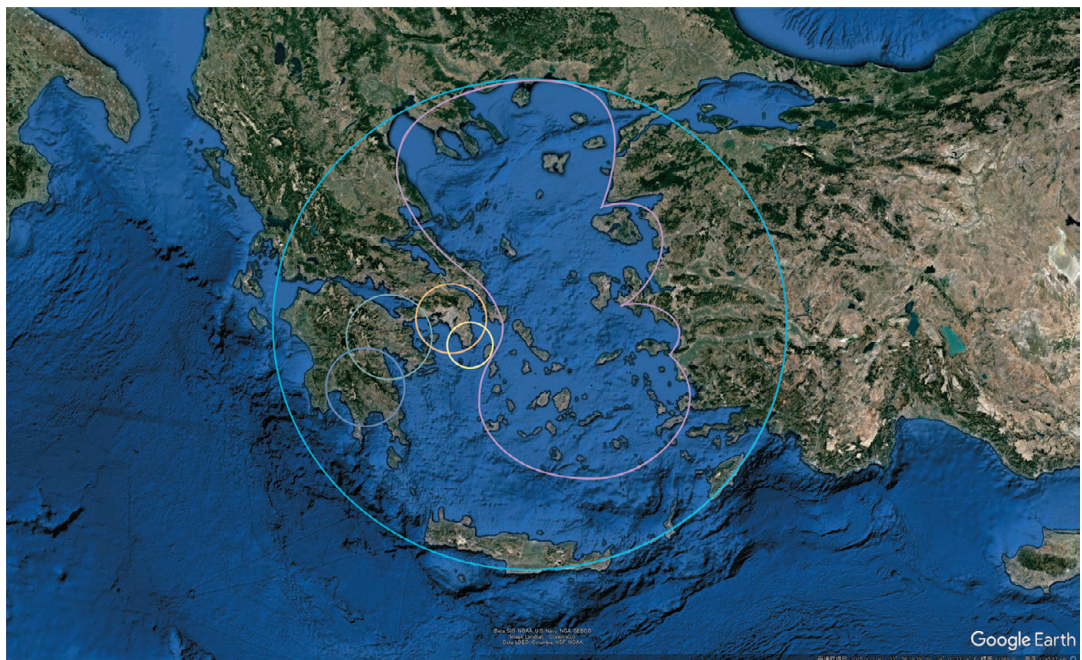
4.

アッティカ盆地の広がりには緩やかな斜面による広がりである。それは北方の山脈の麓に始まり、最後はサロニコス湾に到達する。北方の山脈の麓と湾の間には標高差が存在しており、山脈の麓から海岸までの直線距離約20kmに対して200mほどである。それゆえサロニコス湾に浮かぶ船上からアッティカ盆地を臨むとき、目にする風景は丁度浅い仰角をもって鳥瞰するような状態になるのではないかと想像するのである。そしてそこに東西の山脈の裾野の傾斜を加えるとすれば、或いはパノラマ写真によって実現されるような空間を包み込むような印象が生成されているのではないかと想像するのである。アッティカ盆地を舞台とした開放性と閉鎖性、或いは求心性の共存。地勢に現れる背反する二つの性格の熟知に基づいて、アテネのアクロポリスの丘は一種線遠近法的な視覚効果を持つ景観と共に、むしろ積極的に自身を公開しているようにも見受けられるのである。

アッティカ半島の先端に位置するスニオン岬は、サロニコス湾、エーゲ海、ミルトア海のそれぞれの境界域に飛び出すように存在している。そしてその岬の先端の海拔63mの位置に、地表からの高さ15m程度であったと推測されるポセイドン神殿⁷⁾の遺構が存在している。岬の付け根の北側は陸地ではあるのだが、神殿はほぼ360度、全方位から視認することが出来る。神殿は理論上31kmの彼方から視認が可能であったことになる。ポセイドン神殿の大きさは、アテネのパルテノン神殿には大きく及ばない。しかし両者は、人工物と自然物の性格の異なりのコントラストを見せつつ平坦部の只中に一

体となって屹立している。ミケーネとスパルタのアクロポリスのそれが、その地の地形に沿うように、ある意味では馴染むように、更に言えば幾ばくかの隠遁の、つまり敵対勢力への警戒の上に設けられているように見受けられるのに対して、スニオン岬のポセイドン神殿とアテネのパルテノン神殿は、あたかも自然の高みから悠々と自身を開放しているように見えるのである。

Fig.7は、Fig.1で示した地中海地域の眺めの中から、エーゲ海地域に焦点を当てたものであり、アテネのアクロポリス、スニオン岬のポセイドン神殿、ミケーネのアクロポリス、スパルタのアクロポリスからの理論上の視認可能圏と、キクラデス諸島以北、クレタ島以北のエーゲ海の経済圏を重ねて記してみたものである。



● クレタ島以北 ● キクラデス諸島以北 ● ミケーネのアクロポリス ● スパルタのアクロポリス ● アテネのアクロポリス ● ポセイドン神殿
Fig.7 エーゲ海地域における、ミケーネ、アテネ、スパルタのアクロポリスとポセイドン神殿からの視界
Google Earth Proから取得したデータに加筆
作成：2023年11月6日

ミケーネのアクロポリスとスパルタのアクロポリスが、それぞれに誕生の時代を大きく隔てていながら、その視界域の多くを陸地に留めているのに対して、他の二つ神殿のそれからは、眼前に広がる海洋と、エーゲ海への指向が感じられるのである。海洋へと突出したスニオン岬と平坦部に突出したアテネのアクロポリスからの視界域を重ねれば、尚更にそう思われるのである。勿論、ミケーネとスパルタ両市においても、同様の試みはされているに違いないと推測するのであるが、スニオン岬のポセイドン神殿とアテネのパルテノン神殿から海洋へと向けて放たれる反射光に、地中海世界の人間の営みを照らし出す灯台を感受するのは私だけなのであろうか。

スニオン岬のポセイドン神殿の建設は、アテネのパルテノン神殿の建設に僅かに先んずるが、両者が建設された時期はほぼ同じである。海に対する宣言の先行。多少の穿ちを持って思考するならば、スニオン岬のポセイドン神殿の建設には、海神を奉る以外のエーゲ海地域に対する宣言が込められているように感じられるのである。

アルカイック彫刻の登場は、アレクサンドリアにおけるエジプト彫刻との遭遇が始まると聞き及んだことがあるが、その始まりにあった説明的で、奥行きのない当初の造形は、やがて立体感と自由な身体の動きの表現を獲得し始め、ついに古典と称される造形に到達する。人工構造物が獲得した自在な光の反射と、海という広がりをも前提とする人間の営みに、暗黒時代の到来とともに姿を隠した、かつて初めてギリシア語を用いたギリシア人の再来を思うことがあるのである。



Fig.8 宇宙空間に浮かぶ地球の眺め
Google Earth Proから取得したデータに加筆
作成：2023年10月27日

Fig.8は、地球表面から約14600km離れた宇宙空間からの地球の眺めである。ノルウェー王国領であるスバルバル諸島から地中海海域を経て南アフリカ喜望峰まで、経度方向であればアフリカ大陸西岸からインド亜大陸を経て東アジアの一部の範囲に広がる様々な地表の様子が観察される。

太陽放射光の受容の差異によって地表は熱量＝エネルギーを吸収し、放出する。昼と呼ばれる時間帯と夜と呼ばれる時間帯は交

差しながら連結しており、ほぼ一定の周期で各地域に独自の熱量＝エネルギー＝太陽照射光が届けられる。大気の循環が生み出され、その大気もまたエネルギーの吸収と放出に関与する。地球表面には、地球誕生の過程で与えられた地形とそこに現れる地勢が存在しており、大気圏内に生成されたエネルギーはそれらと物理的な出会いを行うことになる。

Fig.7に示された地球は美しい。人工衛星により取得された宇宙の合理を示すデータに基づくものであるのだから、その「美しさ」には一定の普遍性に関わっていると考えてもよいように思われる。しかしその感情の生成に関わる地球の姿は、厳しく複雑極まりない変質と変容の結果として示されている。宇宙＝コスモスと呼ばれる不可解な合理の広がりとは、その不可解さゆえに混沌＝カオスとして捉えうるかもしれない。アテネのアクロポリスの丘に建つパルテノン神殿は、宇宙としての混沌、コスモスとしてのカオスの海に浮かぶ地球に在って太陽照射光を浴びて輝いている。遙かな天空への志向とその実現を目指す垂直の壁。しかし人類が鉄とガラスをものすることでその実現の可能性を手にするのは、19世紀におけるモダニズム建築の出現によってであった。アッティカ盆地の厳しく荒々しい表情を見せて聳える垂直の岩壁に在って優美さと力強さを見せて立つパルテノン神殿は、唯一無二の者のみが示し得る誇り高い孤高と孤独の姿を観る者に示し続けている。その姿は漆黒の宇宙に輝く太陽系第三惑星地球の姿と交差するのである。

参考文献

- ・Nicholaos Chr.Stanpolidis (Ed). (2003年)
『SEA ROUTES・・・』FROM SIDON TO HUELVA INTERCONNECTIONS IN THE MEDI-TERRANEAN 16th-6th c. BC.
CULTURAL.OLYMPIAD
ISBN 960-7064-40-2
- ・フェルナン・ブローデル著, 尾河直哉訳『地中海の記憶』: 先史時代と古代』東京: 藤原書店, 2008.
ISBN978-4-89434-607-9
- ・神田每実著「光と形－古代美術とその技法にみる光の影響とはたらき－」愛知県立芸術大学紀要 No.32, 2003.
- ・神田每実著「光・陰影・形－混沌と服装の可能性」愛知県立芸術大学紀要 No.33, 2004.
- ・神田每実著「光・陰影・形－古代美術とその技法に観る光の影響とはたらき」愛知県立芸術大学紀要 No.34, 2005.
- ・神田每実著「クローサー古代ギリシア彫刻における様式の変化と発達」愛知県立芸術大学紀要 No.35, 2006.
- ・神田每実著「風土、文化、造形－人工構造物が示す光の効果－(2)」愛知県立芸術大学紀要 No.51, 2022.
- ・神田每実著「風土、文化、造形－人工構造物が示す光の効果－(3)」愛知県立芸術大学紀要 No.52, 2023.

註

- ¹⁾ F・ブローデル著, 尾河直哉訳『地中海の記憶』: 先史時代と古代』東京: 藤原書店, 2008.
- ²⁾ ペロポネソス半島南部の山間地に存在するミケーネ市を中心として成長拡大し、クレタ島やアナトリア半島西岸を含めたエーゲ海方面において、軍事的・経済的に強い支配力を示した青銅器文明。
- ³⁾ 古代ギリシアにおける紀元前1200年から紀元前700年頃までの間における文字資料に乏しい時代。
- ⁴⁾ 神田每実著「クローサー古代ギリシア彫刻における様式の変化と発達」愛知県立芸術大学紀要 No.35,2006. p.102
- ⁵⁾ 水平線、地平線までの距離の計算方法。
- ⁶⁾ F・ブローデル著, 尾河直哉訳『地中海の記憶』: 先史時代と古代』東京: 藤原書店, 2008. p.26, 偏在する山々より引用。
- ⁷⁾ ギリシア共和国のアッティカ半島南端に立つ海神ポセイドンを祀る神殿。紀元前444年に創建されたとされる。

参考URL

ミケーネ文明 <https://ja.wikipedia.org/wiki/ミケーネ文明>
暗黒時代 [https://ja.wikipedia.org/wiki/暗黒時代\(古代ギリシア\)](https://ja.wikipedia.org/wiki/暗黒時代(古代ギリシア))
バルバロイ <https://ja.wikipedia.org/wiki/バルバロイ>
地平線公式 <https://manabitimes.jp/math/1233>
アクロポリス <https://ja.wikipedia.org/wiki/アクロポリス>
アテネ <https://ja.wikipedia.org/wiki/アテネ>
スパルタ <https://ja.wikipedia.org/wiki/スパルタ>

図版キャプション

- Fig.1 地球の上空約5400kmからの地中海地域の眺め／Google Earth Proから取得／作成日：2023年10月27日
- Fig.2-1 アクロポリスの丘南北断面／Google Earth Proから取得したデータに加筆／作成：2023年10月23日
- Fig.2-2 アクロポリスの丘東西断面／Google Earth Proから取得したデータに加筆／作成：2023年10月23日
- Fig.3 アテネのアクロポリスを中心とした半径約44km圏と視界の開放範囲、及びアッティカ盆地と盆地を挟む山地の断面図をシミュレートする基準線／Google Earth Proから取得したデータに加筆／作成：2023年10月20日
- Fig.4 アッティカ盆地山地断面／Google Earth Proから取得したデータから切り出し編集／作成日：2023年11月3日
- Fig.5-1 ミケーネ／南西側山地 - アルゴリコス湾断面／Google Earth Proから取得したデータに加筆／作成：2023年10月31日
- Fig.5-2 ミケーネ／コリンソス湾 - 山地 - アルゴリコス湾断面／Google Earth Proから取得したデータに加筆／作成：2023年10月31日
- Fig.5-3 ミケーネ／北東側山 - アルゴリコス湾地断面／Google Earth Proから取得したデータに加筆／作成：2023年10月31日
- Fig.6-1 スパルタ／中央山地 - 盆地 - ラコニア湾断面／Google Earth Proから取得したデータに加筆／作成：2023年10月31日
- Fig.6-2 スパルタ／北東山地 - 盆地 - 南西山地断面／Google Earth Proから取得したデータに加筆／作成：2023年10月31日
- Fig.7 エーゲ海地域における、ミケーネ、アテネ、スパルタのアクロポリスとポセイドン神殿からの視界／Google Earth Proから取得したデータに加筆／作成：2023年11月6日
- Fig.8 宇宙空間に浮かぶ地球の眺め／Google Earth Proから取得したデータに加筆／作成：2023年10月27日

執筆者

神田 每実(美術学部彫刻専攻 教授)